

平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ソウハチ

学名 *Hippoglossoides pinetorum*

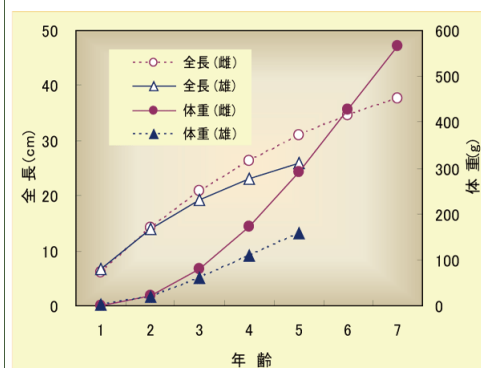
系群名 日本海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄5歳、雌7歳
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場: 冬～春季(1～3月)、対馬周辺海域および島根県浜田沖
索餌期・索餌場: 夏～秋季、日本海西部
食性: エビジャコ類やアミ・オキアミ類を主に捕食、全長15cm以上ではキュウリエソなどの魚類、20cm以上ではホタルイカ等のイカ類が胃内容物中に占める割合が高い
捕食者: エビジャコ類(幼稚魚期)

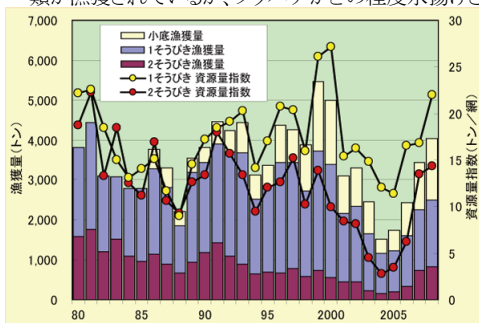


漁業の特徴

日本海西部海域では、1そうびきと2そうびき沖合底びき網(沖底)、小型底びき網(小底)などの底びき網や刺し網、釣・はえ縄等で漁獲されているが、漁獲の大半は底びき網によるものである。1そうびき沖底の漁場は島根県以東の海域が中心であり、2そうびき沖底は対馬周辺海域～島根県沖が漁場である。1988年以前は、1そうびきと2そうびき沖底の漁獲が底びき網による漁獲の80～90%を占め、残りが小底によるものであった。1988年以降は沖底の漁船数が盛期の50～70%に減少したこともあり、近年は小底による漁獲割合が若干高くなっている。

漁獲の動向

本種の総漁獲量は、1980年代から小さな増減を繰り返しながら漸増し、1999年には5,000トンを超えるピークをむかえるが、2004年には1980年以降最低の1,510トンまで減少した。2005年以降漁獲量は急激な増加傾向を示し、2008年には1990年代後半と同等の4,037トンであった。2008年に日本の200海里内において韓国漁船により8555トンのカレイ類が漁獲されているが、ソウハチがどの程度水揚げされているか明らかにされていない。

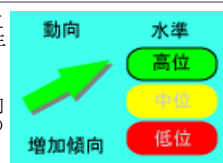


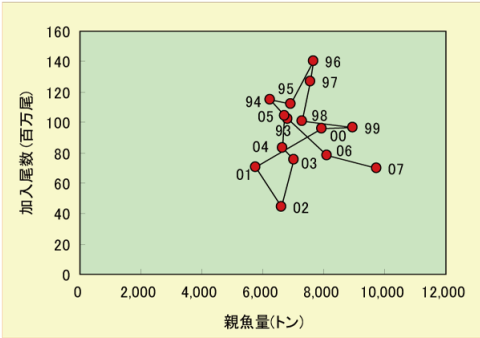
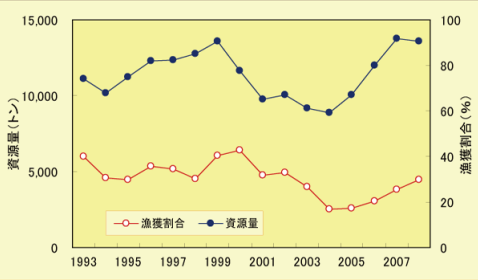
資源評価法

1そうびきおよび2そうびき沖底による漁獲量と漁獲物の生物測定結果の関係に基づいて年齢別漁獲尾数を算出し、小底の漁獲量と併せて日本海西部海域における本種全体の年齢別漁獲尾数に引き延ばした。算出された年齢別漁獲尾数に基づいて、資源解析(コホート計算)を行った。本種は0歳魚がほとんど漁獲されないため、コホート計算結果は0歳魚を含まない漁獲対象資源を示す。

資源状態

資源量は、1993年の11千トンから1999年の14千トンに増加した後、2004年には9千トンにまで減少した。2005年以降、資源量は急激に増加し、2008年には14千トンであった。近年における資源量の増加に伴って、漁獲割合も増加している。親魚量は1999年に9千トンに達した後2001年には6千トンにまで減少したが、2006年以降急激に増加する傾向にある。加入量(1歳魚資源尾数)は、1996～2002年の間に急激に減少し、2003年以降増加傾向に転じたが、2006年以降減少する傾向にある。1993～2007年における加入量と親魚量の関係には、有意な相関関係は見出されなかった。



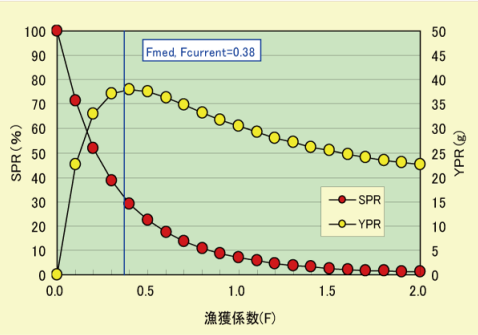


管理方策

2008年の資源量は、資源解析を行った1993～2008年において、1990年代後半と同等の高い水準に達した。加入量は、2006年以降減少する傾向にあるが、親魚量は2006年以降増加傾向を示している。最近8年間(2000～2007年)の再生産成功率が将来継続した場合に資源量が維持される漁獲圧(Fmed=0.38)は、現在(2008年)の漁獲圧(Fcurrent=0.38)とほぼ同等と試算された。したがって、現在の漁獲圧を維持することが望ましい。

	2010年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	3,600トン	Fmed	0.38	28%
ABCTarget	3,000トン	0.8Fmed	0.30	24%

- F値は各年齢のFの単純平均
- 漁獲割合はABC／資源量



資源評価のまとめ

- 資源量は2005年以降増加傾向にあり、現在は高位水準にある
- 加入量は減少傾向にあるが、2006年以降の親魚量は増加傾向にある
- 近年の資源量の増加に伴い、漁獲圧も増加している

管理方策のまとめ

- 将来資源量が維持されると試算された漁獲圧と現在の漁獲圧が同等であるため、現在の漁獲圧を維持することが望ましい
- 加入量が減少傾向にあるため、若齢魚への漁獲圧を減少させることが、近年の好漁を維持するために重要である

資源評価は毎年更新されます。